

大乘

DAIJO 法話

自他ともに心豊かに生きる



北海道・善行寺住職
なわ こうじょう
名和 康成

近年のインターネットの発達、普及により、政治家やスポーツ選手、芸能人などが発した言葉や行動が注目を浴びることが頻繁になりました。特に、ひいきにしている著名人の発言には目が向きやすく、知らず知らずのうちに自分の考え方にまで影響を受けていることもあり、生き方や心のあり方を考えさせられる機会が増えてきているような気がします。

私たちの宗門においては、伝灯奉告法要のご親教(法話)として、ご門主が「念仏者の生き方」

性の方が、認知症のお連れ合いと暮らすご苦労が多い日々を省みて、「私は三毒の煩惱(むさぼり、いかり、おろかさ)を周囲にぶつけながら生きております」とおっしゃっていました。非常に穏やかな性格の方でしたので、その言葉が心に深く残りました。私も人には優しくありたいと思うのですが、家族など、特に自分にとって関係が近くなればなるほど、そのことに難しさを感じることが多いような気がします。

阿弥陀さまのお慈悲のお心は「大悲」とも言われ、すべてのものの痛みを共に痛み(悲)、愛することや憎しむことを超えた心安らかな境地を与えよう(慈)というものです。どんな状況であっても相手を優先し、決して見返りを求めることはありません。反対に私たちは、自分を

をお示しになり、昨年には、その肝要を四か条にまとめた「私たちのちかい」をお示しくださいました。その一番はじめに「自分の殻に閉じこもることなく、穏やかな顔と優しい言葉を大切にします。微笑み語りかける仏さまのよう」とあります。「穏やかな顔と優しい言葉」とは『無量寿経』にある「和顔愛語(和やかな顔と慈愛に満ちた言葉)」というご文がその依りどころとなっているのでしよう。

普段よくお寺でお聴聞されているご高齢の男第一に考えることがほとんどで、人に対して何かしたときには「ありがとう」の一言がないだけで気になるのです。自分にとって都合がよいときは気持ちよく人に接することができても、都合が悪くなれば途端に微笑みかけることすら難しくなるのが私たちの姿ではないでしょうか。「私たちのちかい」を唱えらると、まるで鏡の如く自分自身のありのままの姿を知らされることです。自己中心的な考え方から離れられない私だからこそ、すでに阿弥陀さまのお救いのはたらきの中にあることをよろこびつつ、他者とともに生きていく道を、あらためて考えていきたいものです。

以前、飛行機に乗った時のことでした。着陸の三十分ほど前から、近くに座っていた三歳ぐ

らしいの男の子が大声で泣き始めました。ご両親が必死に泣き止ませようとしていましたが、結局着陸するまでずっとその泣き叫ぶ声は満席の機内に響き渡っていました。ご両親のこわばった表情に、周囲の方々に対する申し訳なさやヒシヒシと伝わってきて、私までいたたまれない気持ちになりました。

すると、ベルトの着用のランプが消えた途端、ご両親はいち早く立ち上がり、「皆さま、大変ご迷惑をおかけいたしました！」と深々と頭を下げて大きな声で謝られたのです。その光景にも驚きましたが、次の瞬間、周囲の人たちが、「気にしないでいいのよ」「耳が痛いんじゃない？大丈夫？」「いやあ、自分の子が小さかった頃を思い出したよ」と、口々に声をかけ始め

たのです。皆さんの優しい言葉に励まされたところのご両親は、みるみる表情が和らいでいききました。どんなにかホッとしたことでしょう。まさに和顔愛語に満ちた場面を目の当たりにし、私の心も温かさでいっぱいになりました。やはり人は「穏やかな顔と優しい言葉」に支えられるものなのだ実感した出来事でした。

自分を最優先し、時に人を憎んだり、怨んだりしながら、まるで仏さまとは真反対の生き方をしている私です。そんな私が、ささいなことでも他者に対して思いやりをもって接することができたならば、それはあくまでも「阿弥陀さまのお慈悲のお心を聞かせていただいたおかげ」といただいでいくことが大事なのでしょう。

如来大悲の恩徳は



カット 長井多美栄

身を粉にしても報ずべし

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

(註釈版聖典610頁)

阿弥陀さまがこの私をお救いくださるそのご恩は、「身を粉にしても」「ほねをくだきても」返すことのできないくらいのものをいただいたということなのです。このご恩を知らせていただいたならば、できる限り報恩の生活をおくらせていただきたいと思うのです。それは、お念仏を申しつつ、み教えとともにこの人生を歩んでいくということなのです。

和顔愛語に満ちた「自他ともに心豊かに生きる社会の実現」のために、お聴聞を心がけ、他者との歩みを大切にしていきたいものです。